

## 防長の大坂陣こぼれ話—大坂方武将とその子孫たち—

慶長 19 年 (1614) と 20 年 (1615) の 2 度にわたり、徳川家康・秀忠父子が率いる幕府軍が、先の天下人豊臣秀吉の遺児秀頼を大坂城に攻撃します。世にいう大坂冬の陣と夏の陣です。その結果、慶長 20 年 5 月 8 日に秀頼が自刃して豊臣氏は滅亡、徳川氏による支配が全国に及ぶこととなりました。

周防・長門の 2ヶ国を治める毛利氏は、幕府軍の一員としてこの戦いに加わりませんが、残された資料からは、大坂方との関係を窺わせる痕跡が見え隠れするのです。

今回の展示では、文書館所蔵の資料から、大坂方として戦った武将やその子孫と毛利氏との関係を垣間見たいと思います。

### 〔1〕後藤左門—後藤又兵衛の子、山口で死す—

後藤又兵衛は、福岡藩主黒田長政の家臣で、武勇の誉れ高い武将でした。ところが長政と対立して出奔、浪人となります。そして慶長 19 年、大坂城へ入ります。

大坂入城後も浪人武将の代表格となり活躍しましたが、慶長 20 年 5 月 6 日、大坂城南方で繰り広げられた道明寺の戦いで戦死します。

ところで又兵衛には複数の男子がありました。その長男という左門は、摂津国堺(現大阪府)で黒田長政に捕縛されるものの、幕府の手を経て毛利氏へ預けられることになったとのことです(福田千鶴『後藤又兵衛』中央公論新社、平成 28 年)。

さて幕府は、大坂冬の陣に先立ち、左門を使って又兵衛を大坂方から離反させようとしたようです。【資料 1】では、又兵衛・左門親子を「両御所様」(家康と秀忠)に拝謁させ、知行を十分に与えて直臣にとりたてたいので、預けた左門を護送するよう幕府が萩藩に指示しています。これを受けて萩藩では、【資料 2】にあるように、三上就忠・元友父子などを左門につけました。ところが、左門は監視の目をかいくぐって脱出を試み、咎められると「灰屋」において自害したとのことです。幕府の指令を守れなかったことから、当日の監視をしていた元友は責任を取って切腹したそうです。父を思う左門、御家の安泰を願う元友。命を捨てる武将の子たちの悲しい姿と言えるでしょう。

### 〔2〕明石掃部の子が防長に！？—続く探索—

明石掃部(あかしかもん)は備前国(現岡山県)の大名であった宇喜多氏の家臣で、関ヶ原の戦い後、主家が改易されるに伴い浪人となりました。熱心なキリスト教徒でもあったと言われます。大坂陣では大いに奮戦しましたが、戦死したとも、戦場を離脱したとも言われ、戦後の足取りは不明です。

さて【資料 3】は、夏の陣の翌年、明石掃部の子に関する情報を毛利氏に尋ねたと思われる資料です。彼を九州まで送り届けたという者の証言があったことから、こうした問い合わせに至りました。回答を求めた人物は明らかではありませんが、幕府関係者と見るのが自然でしょう。

掃部の子は筑後国(現福岡県南部)の大名・田中氏の家臣の「むこ(聾カ)」になっていた関係で、九州に逃れる途中、掃部の姉、すなわち伯母の住む毛利領内の「秋穂」に立ち寄ったと言うのです。海沿いの「秋穂」とありますので、現在の山口市秋穂を連想してしまいましたが、正確な位置は不詳です。

この情報の真偽は定かではありませんが、幕府は、大坂方に与した名のある武将の子までも厳しく探索していたことを窺わせる資料です(ただし、掃部の子も大坂方で

あったと推測されます)。

### 〔3〕佐野道可始末—厳しすぎた子への処断—

萩藩の大坂の陣を語る時、佐野道可の一件は避けて通れない事件と言えましょう。

大坂陣に際して、萩藩の家格「一門」筆頭の宍戸元統の弟にして、大内氏以来の名家・内藤家の養子となっていた内藤元盛が、「佐野道可」と名を改め、豊臣方に加わっていたというのです。

戦後、元盛は京都近在において自刃し(5月21日のことと伝わります)、大坂入城の責任を取りましたが、残された子らにも過酷な運命が待ち受けていました。

佐野道可の子の名は、内藤元珍と栗屋元豊。彼らは幕府の求めに応じ、家康の元へと赴きます。現地では、父とは長年不和で音信不通だったことや、父の大坂入城の事実を事前に知らなかったことなどを訴えます。【資料4】では、家康付きの本多正純や、京都の治安維持などを掌る京都所司代の板倉勝重が大坂方武将の遺児に厳しい姿勢を示す一方、福原広俊は彼らの助命に奔走しています。また、柳生宗矩のように、幕府の中にも彼らの助命に「一肌脱ごう」としていた人物もありました(【資料5】)。

その後、2名は国元へ戻されましたが、帰国後、各自の在所で切腹に追い込まれてしまいます。大坂夏の陣終結後5ヶ月が過ぎた10月19日のことでした。【資料6】は勝重から毛利輝元へ宛てた書状ですが、彼らの死は「成敗」よるものとして幕府へ報告されたことがわかります。

これまで道可の大坂入城は、毛利輝元の密命により秀頼を支援するためと言われてきました。しかし最近では、これとは違った見解も出てきており、研究の深化が待たれます。

### 〔4〕われら大坂方武将の子孫なり—様々な伝承—

文書館所蔵の徳山毛利家文庫「譜録」は、徳山藩士が、歴代当主の役職や家族、俸給などを書き上げて藩に提出した資料です。

各家の「譜録」をひもとくと、徳山藩士には様々な出自を持つ者がいることが窺えます。特に今回、祖先を大坂方の武将であったとする家が6家ありました(同一祖先は1家として計算。【資料7】～【資料11】)。

各家の経歴を概観すると、国富家・谷野家は大坂城に入城し、戦死した者もありました。また奥田家は真田信繁の部下として、また川口家は秀頼の側近・木村長門守※の部下として戦ったと伝えています。さらには吉村家・河村家はいずれも真田信繁(幸村)の遺児を祖とし、彼が戦禍を逃れて九州に赴く途中、周防国にたどり着いたとの伝承を持っています。

「譜録」は18世紀後半作成ですので、大坂陣当時のことをどの程度正確に伝えているかの判断は難しいところですが、今は各家の伝承を尊重したいと思います。

※木村長門守(?~1615)

豊臣秀頼家臣。重成を称したとも。大坂の陣では一軍を率いる。冬の陣の講和の際には秀頼の使者を務めた。夏の陣では5月6日、大坂城東方での若江の戦いにおいて、彦根藩井伊家の部隊と戦い戦死した。

#### 〔展示期間〕

〔1〕〔2〕12月1日(木)~12月9日(金)

〔3〕12月10日(土)~12月18日(日)

〔4〕12月20日(火)~12月27日(水)